

研究ノート：

共同注視と事態把握

北 岡 一 道

(2016年3月1日受理)

キーワード key words

共同注視、事態把握

1. はじめに

言語や記号では、〈話し手（記号の送り手）〉と〈聞き手（記号の受け手）〉そして、言語でかたられる〈対象（事態）〉が、1つのセットとして、とりたてて重要視されることが、おおい。逆に、たとえば、〈話し手（記号の送り手）〉と〈聞き手（記号の受け手）〉など人間的な存在を、便宜上、無視するという理論的なたちばもある。

ここでは、この三者が、主要な要素となる言語のみかたにもとづいて、それがえがく、言語の基本的なすがたというもののかんがえてみる。

そのなかでも、〈共同注意〉（＝〈共同注視〉）、〈事態把握〉、〈言語獲得〉にかかわる若干の所説（群）をとりあげる。それぞれ、ご専門のフィールドがちがうが、言語のおなじ（か、にた）側面にせまっけて、たがいが補完して、言語の、よりよいすがたを、えがきだすことが期待される。

2. 〈共同注視〉から〈映像枠〉へ

認知言語学では、おもに発達心理学の概念である〈共同注意〉（あるいは〈共同注視〉）を適用して、言語記述をおこなうことがなされる。言語の説明にかんして、〈共同注意〉を重要視する立場には、トマセロ氏（Tomasello）（1999）らがおられる。

トマセロ氏にしたがうと、言語について、なにかしら生得的な（したがって一般的な＝通言語的

な）仕組みというものを基本的に仮定しない。こどもは言語発達の初期の段階で、各言語におうじて、表現を学んで、それを一般的な体系へと発展させていく、とかがえる。

とくに言語むけの装置はないとかがえるので、言語以外のさまざまな記号を言語から、とりたててわかることはない。諸記号とともに、言語が存在することになる。

ここでは、社会関係の相互的なやりとりのなかで言語が発達する、というみかたをする。その過程で重要なのが、たとえば〈共同注意、ジョイント・アテンション〉の概念になる。

〈共同注意〉は、端的には、親子（など）の関係で、視線や指さしなどをつかって誘いかけ、相手とともに、〈おなじ対象をみること〉である。〈みること〉であり、〈共同〈注意〉〉、という語のほか、〈共同〈注視〉〉といういいかたもされる。〈共同注意〉は狭義では、こどもが、大人の行動の意図を理解しているばあい。広義では、その意図の理解がなく類似の行動ができるばあいである。

具体物への誘いかけを基本の型とかがえるので、〈みる〉＝〈注視〉といういいかたは、わかりやすい。〈共同〈注意〉〉という一般的な用語では、具体物以外にも、発展していくことに言及されるだろう。たとえば、〈このお菓子〉から〈この音楽〉、〈この暑さ〉、〈この痛み〉。

一般に、9か月くらいで、非言語の〈共同注意〉（狭義）があらわれ、その後、2歳くらいで、内面的な心の状態をあらわす言語表現や概念も成立す

る、とされる。そして、たとえば、自閉症児では、この〈共同注意〉の発達に問題がおこりやすい。最近の言語学でも、〈共同注意〉を日本語の文法現象、直示用法－非直示用法の分析にあてはめた研究がある。指示語、終助詞などについても援用される。また日独英の翻訳関係に視点を、適用したものなども、みられる。

日本では、熊谷氏（2011）がこの〈共同注意〉の概念をもとに、日本語の骨格的なしくみについて、興味深い示唆をおこなっておられる。氏は、〈自閉症児のコミュニケーション障害とその支援を研究〉しておられ、言語学、日本語学といった領域がご専門ではない。熊谷氏は〈共同注視〉という語をつかわれる。

言葉の発達の初期に、

母親－子ども－具体物

という関係のなかに、〈共同注意〉があらわれる。しかし、自閉症のこどものばあい、〈共同注意〉の出現に障害がみられる。

この〈3項関係〉は、一般化され、日本語の特徴がみちびかれる。

話し手－聞き手－対象

について、〈日本語の基本は、話し手と聞き手が、目のまえの映像枠のなかにある対象をみるというもの〉とされる。あるいは、〈話し手と聞き手は、向き合わず、ならんで映像を注視する〉。これは、イメージとしていうと、居間の団欒で、家族が〈テレビ〉にみ入っているようなものだ。〈映像枠、映像〉といわれるものが、〈テレビ〉に相当する。〈映像をくみる〉という以上、〈共同注視〉が、より適当ということになる。

〈話し手〉も〈聞き手〉も画面からは、はなれており、（〈映像枠〉からは）消えてしまう。〈相手とむきあっていない〉という状態になる。

これにたいし、英語は、〈話し手と聞き手がむかいあい、〈ピリヤード〉のゲームをしている〉ような形になる。熊谷氏によると、英語はその典型で、中国語はそれにちかい、とされる。同様に、韓国語は日本語にちかい。

3. 〈事態把握〉と〈見え〉

また認知言語学の文脈で、日本語の特徴として、〈事態の把握のしかたが〈主観的〉〉である、といったいいかたが、される。

言語によって、〈好まれる言い回し、*fashion of speaking*〉というもの（の範囲）があり、ある一定の表現群が優勢であることがおおい。この背景に、言語による〈事態把握〉の傾向性によっているばあいがある。各国語において、ものごとのとらえかたに差がみられる、とする。

日本語と英語の対照研究でいわれてきたように、〈ナル的な言語とスル的な言語〉（池上（1981）あるいは、〈アル言語とスル言語〉（金谷（2004））といった対立は、両言語での事態の把握のしかたのちがいを反映している、とされる。

この事態把握について、まず話し手が〈発話〉や〈認知〉の〈主体〉となる。それが、ある物事（〈事態〉）のなかにある。その事態について、言語化していく。つまり話し手が言語表現を表出していく。

このモデルのなかで、日本語は、話し手の視点から事態をみた表現がおおく、この点で英語や中国語と対比的な特徴をしめす。〈話し手からの視点〉が特徴的であるという意味で、日本語は〈主観的事態把握、*subjective construal*〉が〈好まれる〉。〈主観的事態把握〉の〈傾向〉が顕著である、といわれる。

〈主観的事態把握〉といわれるものは、現象としては、言語表現が、（おおくは、文内でいどの単位で）話し手の視点から〈〈みた〉様相〉をしめす、ということである。これは、たとえば、〈直接的に〈みえ〉を表現〉するとされたりする。

たとえば、日本語に〈テンス／スペクト〉をしめす終助詞〈タ〉がある。相当機能の文法要素のない中国語やタイ語の現象が比較され、日本語の〈主観性〉が論じられたりする。

タイ語の相当要素は〈文法的義務要素〉ではない。タイ語は文字組織以外は、骨格的に中国語にいた文法構造、構文法をもっている。中国語の相当要素も、〈文法的義務要素〉でない。

また、たとえば、韓国語は、日本語と同様に〈

主観的事態把握>の傾向がある、とされる。これは、韓国語では、(英語などで他動詞構文をとるところを)自動詞構文、形容詞構文をとる、主語省略をおこなうなど、のことがある。

日本語と韓国語はおなじ、<主観的事態把握>の系列にある。そのうえで、両者の対照研究となると、(すべて表現にはある種の<事態把握>があるという前提にたてば)さらに微細な<事態把握>の種差が論じられることだろう。

ここで、<好み；好まれる>と<傾向>という言葉であるが、表現としてだいぶ差がある。指すべき客観的な事情はおなじかもしれない、が。<好み>は情緒的な好悪を示唆するし、<傾向>は客観的な数量状態を連想する。

これは、<好み>に関連して、うへの<好まれる言い回し、fashion of speaking>についても、にたことがある。両表現の訳語としての対応関係は、一般的な用法としてすぐれたものだろう。

ただ、直接に好悪に関係するいいかたになっている。また、<好まれる>というのと、<<好まれない>言い回し>とはなにか、といったことになるだろう。

同様に<主観的事態把握>にも、ややにた事情がある。<主観的>というと、日常的な用法では<個人にかたよった見方、価値観(あるべき客観視ができない)>という意味あいがある。

上述例のように、言語学において問題とされる<主観性、subjectivity>(主観的、subjective)であることは、話し手の<<みる>様相>が表現される、ということである。当該言語に、その表現が、傾向的にのおおくみられる、ということである。

また<事態把握>として、現在おおく、とりあげられるのは、<主観的/客観的>という対立(対立といわず、一方だけのばあいも)関係であるようだ。

ほかに、たとえば、<過程志向/結果志向>がとりあげられる。これも、<ナル/スル>言語関連、<アル/スル>言語関連の問題として従来、議論されてきたものが、現在、認知言語学の枠内で再分析されることになっている。

4. <映像性>と<主観性>

<事態把握>について、1つの研究がある。櫻井(2013)氏は、言語発達のなかで<事態把握>の獲得が、日本語と英語でことなるか、ということを検討しておられる。

櫻井氏は、まず、BermanとSlobin両氏のデータを紹介される。(Berman, R.A. and Slobin, D.I. Relating events in narrative: a crosslinguistic developmental study. Lawrence Erlbaum Associates.)

そこで、被験者(こども)に<Frog, where are you?>(Mayer, 1969)という24枚の絵からできた、<文字のない絵本>をみせる。Berman氏らはその研究で言語相対的な主張をおこなっておられる。

櫻井氏はその資料を再分析しておられる。データをとる被験者は、日本語と英語ともに、3歳、5歳、9歳。

絵本のなかの場面としては、<シカが少年と犬を崖からつきおとす、という他動性のたかいシーン>がえらばれる。それにかんする被験者の<発話>のデータをみる。

英語；他動的シーン>>

3歳、5歳、9歳>>>英語 発話？

日本語；他動的シーン>>

3歳、5歳、9歳>>>日本語発話？

というわけである。

ここで、<文字のない同一の絵本>ということ、いちおう、<言語外の把握すべき<事態>>と解釈できる。

氏による議論をまとめるとおおよそ、

- 1>英語5歳児、9歳児は、期待される<他動的>な表現をしめた。
- 2>英語3歳児は、<他動的>表現をしめさなかった。
- 3>日本語3歳児、5歳児、9歳児は、期待されるように<他動性の明示はなかった>。
- 4>だから、英語では5歳までに<他動的>なとらえかたが獲得される。

5>英語3歳児は、日本語3-9歳児 (=日本人)と同様、<場所的とらえかた>をしているらしい。

6>岡(2013)氏の指摘のように、<場所的なとらえかた>が、<個のとらえかた>の基底にあるらしい。

ここで、<<個>のとらえかた>と<<他動的な>とらえかた>は同一とみてよいだろう。また、<<個>のとらえかた>、<<場所的>なとらえかた>はそれぞれ、前節のことばでは、<客観的把握>、<主観的把握>にあたる、とかんがえていだろう。

5. むすび

日本語を中心に、うへの言説がえがく、日本語のすがたをまとめてみる。

第1に、日本語は、基本において<事態>を<横並び>の<話し手>と<聞き手>が、ながめる型となっている。<横並び>であって、<向かい合う>のでない。

その<事態>に出現するモノゴトも、<横並び>に存在し、現象していく。<横並び>であって、<向かい合う>ことはなく、<因果・他動>の関係は明示的にはない。

さらに、英語については、

第2に、英語は、基本において<事態>に、<向かい合う><話し手>と<聞き手>が、かかわる型、になっている。

その<事態>に出現するモノゴトも、<向かい合い>現象する。<因果・他動>の関係は明示的である。

英語における言語発達(個人)においては、

第3に、第2項における<横並び>が<向かい合い>に変化(発達)する。

第1項における<横並び>も<向かい合い>に変化(発達)するのではないかと推測される。

第4に、日本語では、1項、2項の類型にかかわる変化(発達)はない。

6. <主要参考資料>

1. 池上嘉彦. 『「する」と「なる」の言語学』. 大修館書店. 1981.
2. 岡智之. 『場所の言語学』. ひつじ書房. 2013.
3. 金谷武洋. 『英語にも主語はなかった』. 講談社. 2004.
4. 熊谷高幸. 『日本語は映像的である, 心理学から見えてくる日本語のしくみ』. 新曜社. 2011.
5. 櫻井千佳子. 言語獲得にみられる<事態把握>と場の言語学. 日本認知言語学会第14回大会CONFERENCE HANDBOOK2013. 10-13. 2013.
6. 守屋三千代, 池上嘉彦. 「現前」と「非現前」の<見え>を重ねる<事態把握>. 日本認知言語学会第15回大会CONFERENCE HANDBOOK2014. 129-32. 2014.
7. Tomasello, Michael. The Cultural Origins of Human Cognition. Harvard University Press. 1999.

7. <付記>

認知言語学の近年の諸問題について、ご教示ください仁愛女子短期大学、大西新吾先生；日本語における<事態把握>の事例について、論者の質問におこたえいただいた昭和女子大学大学院、池上嘉彦先生(東京大学名誉教授)にお礼もうしあげます。